# 確率論, 舟木直久 [1] 読書記録

最終更新: 2022年10月17日

<u>注意</u>: 記述の正確性は保証しません. ややこしいことになりたくないので, 本文の引用は最小限にしています. ? マークは不明/自信なし/要復習を意味しています.

# 誤植と思われるもの (2019/7/25 初版第14刷)

頁	行	誤	正
141	10	$(\Omega = S^n, \mathcal{F}, P)$	$\Omega = (S^n, \mathcal{F}, P)$
239	-3	定理 A.5	定義 A.5

- **■**42,5 ( $\Omega_0 \in \mathcal{F}$  がなりたつこと) Ito[2], p.65, 定理 10.2 より.
- ■42,6 ( $\tilde{X}$  が確率変数であること)  $\{\tilde{X} \leq a\} \in \mathcal{F}$  をいえばよい.

$$\begin{split} \{\tilde{X} \leq a\} &= \left( \{\tilde{X} \leq a\} \cap \Omega_0 \right) \cup \left( \{\tilde{X} \leq a\} \cap \Omega_0^c \right) \\ &= \begin{cases} \left( \{\lim_n X_n \leq a\} \cap \Omega_0 \right) \cup \Omega_0^c & a \geq 0 \\ \left( \{\lim_n X_n \leq a\} \cap \Omega_0 \right) \cup \varnothing & a < 0 \end{cases} \end{split}$$

と変形できるが、 $\{\lim_n X_n \leq a\} \in \mathcal{F}$ 、 $\Omega_0 \in \mathcal{F}$  であるから a によらず  $\{\tilde{X} \leq a\} \in \mathcal{F}$  である. ゆえに  $\tilde{X}$  は確率変数.

**■45,13**  $(x = \pm n \text{ として } n \to \infty \text{ とすればよいこと})$  有界単調数列が収束することと、収束列の部分列はもとの列と同じ極限をもつことによる.

#### **4**6,-6

- $F(x) < w \implies x < Y(w)$ :  $F(x) < w \implies x \le \sup\{y \in \mathbb{R} \mid F(y) < w\}$  である. x = Y(w) と仮定すると、  $\forall y > x$ ,  $F(y) \ge w$  がなりたつが, F の右連続性より  $F(x) = \lim_{y \to x+} F(y) \ge w$  となり矛盾.
- $x < Y(w) \implies F(x) < w$ : 明らか.  $x < Y(w) = \sup\{y \in \mathbb{R} \mid F(y) < w\} \implies F(x) < w$ .

## $\blacksquare$ 46,11 **(関数** Y(w)**)** 関数 Y(w) の例.

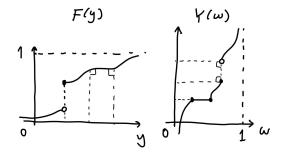


図 1 関数 Y(w).

**■46,-4**  $\forall x \in \mathbb{R}, \{w: Y(w) \le x\} = \{w; w \le F(x)\} = (0, F(x)] \in \mathcal{B}((0, 1))$  ゆえ Y は可測.

- **■47.2**  $\mu((-\infty,x]) = m(Y \le x) = m((0,F(x)]) = F(x)$ . 2つ目の等号で (2.3) を用いた.
- ■47,8 (X と Y の分布が一致すること) 47,2 より任意の  $x \in \mathbb{R}$  に対し,  $m_Y((\infty,x]) = F(x) = P_X((-\infty,x])$  がなりたつ.  $\pi$ - $\lambda$  定理より  $m_Y = P_X$ .
- ■48,4 (絶対連続, 特異) Ito[2], p.130, 18 章.
- **■**61,-2  $(X_{1,1}, X_{2,1}, X_{2,2}, \dots b^r)$ 
  - p 次平均収束すること:  $E[|X_{n,k}|^p] = E[X_{n,k}] = \frac{1}{n}$  ゆえ  $\lim E[|X_{n,k}|^p] = 0$  となる.
  - 概収束しないこと:  $X_{n,k}$  の定義より, 任意の  $w \in (0,1)$  に対し, 任意の n について k が存在して  $X_{n,k}(w) = 1$  となるから,  $\{w \in (0,1); \lim X_{n,k}(w) = 0\} = \emptyset$ . ゆえに  $P(\lim X_{n,k} = 0) = 0 \neq 1$ .
- **1**62,2  $(X_n(w) = n1_{(0,\frac{1}{n})}(w)$  )
  - 概収束すること: 任意の  $w\in (0,1)$  をとる.  $N\geq \frac{1}{w}$  なる自然数 N をとれば,  $n\geq N$  で  $X_n(w)=0$  となる. ゆえに  $\lim X_n(w)=0$ . w は任意だったから  $P(\lim X_n=0)=1$ .
  - p 次平均収束しないこと:  $E[|X_n|^p] = \int_0^{\frac{1}{n}} n^p dw = n^{p-1}$  だから  $\lim E[|X_n|^p] \neq 0$ .
- ■68,1  $((X_n X)_{n \in \mathbb{N}})$  が一様可積分であること) 補題 2.55(1)(2) の条件をみたすことを確かめる.
  - 1.  $(X_n)_{n\in\mathbb{N}}$  が補題 2.55(1) をみたすことと X が可積分であることより,  $\sup_n E[|X_n-X|] \leq \sup_n E[|X_n|] + E[|X|] < \infty$ .
  - 2.  $\sup_n E[|X_n-X|,A] \leq \sup_n E[|X_n|,A] + E[|X|,A]$  に注意. 任意の  $\epsilon>0$  に対し,  $A\in\mathcal{F}$  が  $P(A)<\delta$  を みたすなら  $\sup_n E[|X_n|,A] < \epsilon/2$  かつ  $E[|X|,A] < \epsilon/2$  となるような  $\delta$  を選ぶ\*1. このとき  $\sup_n E[|X_n-X|,A] < \epsilon/2 + \epsilon/2 = \epsilon$ .
- **■69,14 (** $||X_n| |X|| \le |X_n X|$ **)** 一般の  $a, b \in \mathbb{R}$  について  $ab \le |a||b| \implies |a|^2 2|a||b| + |b|^2 \le |a|^2 2ab + |b|^2 \implies ||a| |b||^2 \le |a b|^2$  であるから.
- **■69,-5 (条件**  $P(|X| = \lambda) = 0$  **について)** たとえば  $(|X_n|)_{n \in \mathbb{N}}$  が単調増加のとき,  $|X| = \lambda$  となる w で

$$|X_n| \cdot 1_{\{|X_n| < \lambda\}}(w) \to \lambda \neq 0 = |X| \cdot 1_{\{|X| < \lambda\}}(w) \tag{1}$$

となるおそれがあるが,  $P(|X|=\lambda)=0$  なら概収束  $|X_n|\cdot 1_{\{|X_n|<\lambda\}}\to |X|\cdot 1_{\{|X|<\lambda\}}$  a.s. に関与しない(ので安心).

- **■70,5**  $P(|X|=\lambda)>0$  なる  $\lambda$  が高々可算個しかないから、この後で十分大かつ  $P(|X|=\lambda)=0$  なる  $\lambda$  を選ぶことができている.
- ■70,10 (このことから…) 各  $m=1,2,\ldots,n_0-1$  についてそれぞれ  $E[|X_m|,|X_m|\geq \lambda_m]<2\epsilon$  をみたす  $\lambda_m$  を選んでおく.  $\lambda_0:=\max\{\lambda_1,\ldots,\lambda_{n_0-1},\lambda\}$  とおけば任意の  $\lambda\geq \lambda_0$  で  $\sup_n E[|X_n|,|X_n|\geq \lambda]<2\epsilon$  がなりたつ. よって  $(X_n)_{n\in\mathbb{N}}$  は一様可積分.

 $<sup>^{*1}</sup>$  このような  $\delta$  は  $(X_n)_{n\in\mathbb{N}}$  が補題 2.55(2) をみたすことと, X が可積分であることより存在する.

#### ■80,-5 (単調収束定理を用いる. について)

$$\begin{split} E[X] &= E[\lim_N (X_1^{(N)} \cdots X_n^{(N)})] \\ &= \lim_N E[X_1^{(N)} \cdots X_n^{(N)}] \quad \text{単調収束定理.} \\ &= \lim_N (E[X_1^{(N)}] \cdots E[X_n^{(N)}]) \\ &= \left(\lim_N E[X_1^{(N)}]\right) \cdots \left(\lim_N E[X_n^{(N)}]\right) \quad (X_k)_{1 \leq k \leq n} \text{可積分.} \\ &= E[X_1] \cdots E[X_n] \quad \text{単調収束定理.} \end{split}$$

### ■83,7 (補題 3.20)

- 原材料: n 個の確率空間  $(S_k, \mathcal{S}_k, \mu_k)$ ,  $1 \leq k \leq n$  と n 個の確率変数  $X^{(k)}: S_k \to \mathbb{R}$ ,  $1 \leq k \leq n$ .
- 構成物:  $\underline{1}$  個の確率空間  $(\prod_k S_k, \mathcal{S}_1 \times \cdots \times \mathcal{S}_n, \mu_1 \times \cdots \times \mu_n)$  と  $\underline{n}$  個の確率変数  $X_k : \prod_k S_k \to \mathbb{R}, 1 \le k \le n$ .

$$P(X_1 \in B_1, \dots, X_n \in B_n) = P(X_1^{-1}(B_1) \times \dots \times X_n^{-1}(B_n))$$
  $X_k$ の定義. 
$$= \prod_k \mu_k(X_k^{-1}(B_k)) \quad 直積測度の定義.$$
 
$$= \prod_k P(X_k \in B_k).$$

### ■91,-10 ((1) 証明)

$$E[Z,B] = aE[E[X|\mathcal{G}],B] + bE[E[Y|\mathcal{G}],B]$$
  
=  $aE[X,B] + bE[Y,B] \quad E[X|\mathcal{G}], E[Y|\mathcal{G}]$  の定義.  
=  $E[aX + bY,B]$ .

■91,-7( $Z \geq 0, a.s.$  であること)  $Z \geq 0, a.s.$  でないとすると,  $A \in \mathcal{F}$  があって  $P(A) > 0, \omega \in A \implies Z(\omega) < 0$  がなりたつ. Z が G-可測なので(適当に A を広げることで) $A \in \mathcal{G}$  となるように取り直せる. すると E[Z,A] < 0 となり矛盾.

## ■94,11 (コルモゴロフの 0-1 法則の証明)

- $n \in \mathbb{N}$  に対し  $1_A$  と  $\mathcal{F}_n$  が独立であること:
- P が π-系であること:
  - 1.  $\Omega \in \mathcal{F}_1$  ゆえ  $\Omega \in \mathcal{P}$ .
  - 2.  $A, B \in \mathcal{P}$  とする.  $\mathcal{F}_k$  は単調増加だからある n が存在して  $A \in \mathcal{F}_n, B \in \mathcal{F}_n$ . ゆえに  $A \cap B \in \mathcal{P}$ .
- ℒが λ-系であること:

  - $2. \ A, B \in \mathcal{L}$  で  $A \subset B$  とする.  $C \in \mathcal{T}$  に対し,  $E[1_C, B \setminus A] = E[1_C, B] E[1_C, A] = P(C)P(B) P(C)P(A) = P(C)P(B \setminus A)$ .
  - 3.  $A_n \in \mathcal{L} \nearrow A$  とする.  $C \in \mathcal{T}$  に対し、 $E[1_C, A] = E[1_{A \cap C}] = E[\lim_n 1_{A_n \cap C}] = \lim_n E[1_{A_n \cap C}] = \lim_n E[1_C, A_n] = \lim_n P(C)P(A_n) = P(C)\lim_n E[1_A] = P(C)P(A)$ . 3 番目と 7 番目の等号で単調収束定理を用いた。ゆえに  $A \in \mathcal{L}$ .
- π-λ 定理の適用:

第 1 段より  $\mathcal{P} \subset \mathcal{L}$ . よって  $\pi$ - $\lambda$  定理が適用できて  $\sigma(\mathcal{P}) \subset \mathcal{L}$ .

•  $\sigma(\mathcal{P}) = \mathcal{F}_n$  であること:

$$\sigma(\mathcal{P}) = \sigma(\cup_{n=1}^{\infty} \mathcal{F}_n) = \sigma(\cup_{n=1}^{\infty} \sigma(\cup_{i=1}^{n} \mathcal{B}_i)) = \sigma(\cup_{i=1}^{n} \mathcal{B}_i) = \mathcal{F}_{\infty}.$$

3番目の等号は非自明.

- ⊂:

$$\forall n \in \mathbb{N}, \ \sigma(\cup_{j=1}^n \mathcal{B}_j) \subset \sigma(\cup_{j=1}^\infty \mathcal{B}_j) \implies \cup_{n=1}^\infty \sigma(\cup_{j=1}^n \mathcal{B}_j) \subset \sigma(\cup_{j=1}^\infty \mathcal{B}_j)$$

$$\implies \sigma(\cup_{n=1}^\infty \sigma(\cup_{i=1}^n \mathcal{B}_i)) \subset \sigma(\cup_{i=1}^\infty \mathcal{B}_i). \quad \sigma \mathcal{O}$$
定義

- $\supset: \cup_{j=1}^{\infty} \mathcal{B}_j \subset \cup_{n=1}^{\infty} \sigma(\cup_{j=1}^n \mathcal{B}_j)$  よりわかる.
- B = A とできること:

 $A\in\mathcal{F}_{\infty}$  つまり  $\mathcal{T}\subset\mathcal{F}_{\infty}$  をいえば, (3.9) に  $A\in\mathcal{T}$  を代入することが可能. 実際, 任意の k に対し

$$\mathcal{T} = \bigcap_{k=1}^{\infty} \mathcal{G}_k \subset \mathcal{G}_k = \sigma\left(\cup_{j=k}^{\infty} \mathcal{B}_j\right) \subset \sigma\left(\cup_{j=1}^{\infty} \mathcal{B}_j\right) = \mathcal{F}_{\infty}$$

であるからよい.

**■補足(末尾加法族の典型例)** 各  $\sigma$ -field が確率変数から生成されている( $\mathcal{F}_n = \sigma(X_n)$ )とき、

$$\mathcal{T} = \{\omega \in \Omega; \lim_{n \to \infty} X_n(\omega)$$
が存在する \}

のような、 $\{X_n\}$  の無限の彼方の性質で決まるような事象は末尾加法族の要素.

#### ■122,-1 (Helly の選出定理)

•  $\{n_k^{(j)}\}_{k=1,2,\dots}$  がとれることと  $\tilde{F}(y)$  の構成: 有界実数列は収束部分列をもつ(Bolzano-Weierstrass の定理)ことより,有界実数列  $F_1(y_1),F_2(y_1),\dots$  の収束部分列  $F_{n_1^{(1)}}(y_1),F_{n_2^{(1)}}(y_1),\dots$  がとれる.この部分列の極限を  $\tilde{F}(y_1)$  と定義する.次に,有界実数列  $F_{n_1^{(1)}}(y_2),F_{n_2^{(1)}}(y_2),\dots$  の収束部分列  $F_{n_1^{(2)}}(y_2),F_{n_2^{(2)}}(y_2),\dots$  をとる.この部分列の極限を  $\tilde{F}(y_2)$  と定義する.以上を繰り返して、 $y\in\mathbb{Q}$  について定義された関数  $\tilde{F}(y)$  を得る.

# 参考文献

- [1] 確率論, 舟木直久(朝倉書店, 2004)
- [2] ルベーグ積分入門, 伊藤清三(裳華房)